

2024/5/1

関係各位

Far East Group

会長 大嶋 謙嗣

会報五月号 誓願・信条の構築（三）

目次

- ・ 信条
- ・ 誓願
- ・ 両儀と絶点
- ・ 魂の退化を食い止める

● 信条

宇宙の秩序や生命の道理を踏まえ（①道／造化への帰依）、自分は宇宙で他に代わることの無い生命であるという自覚のもと、自己の運命を愛し、自己の運命を生き切るという覚悟（②自立自尊の覚悟）を決め↓生命の自己燃焼（③生命燃焼の自覚）を図り↓それは宇宙の意志の体現にあるとして、その意志の地上への展開として、勇知仁・愛・信念・誠の具現化（④勇知仁の断行）を図り↓物事の判断基準を定め（⑥判断基準）ながら↓どこまでも崇高を志向する（⑤崇高さを目指す美学）。↓先人の偉大な魂に鼓舞されながら（⑧先人の魂／エール）↓死ぬまで日日自らを新たに成長発展を図っていく（⑦永遠の自己革命）。この循環の中で、自己の魂を躍動させる指針となるのが、「誓願」や「信条」である。

前回までに抽出した「葉隠」の言葉をまた厳選し、アレンジして自己の生命燃焼の指針としたい。

【①道／造化への帰依】

- 天地は陰陽の循環なり 義より上に道はあり 格を離れた姿がある
- ものが二つに成るが悪しき也 道の字は同じ事なり
- ・ 世界は皆からくり人形也
- ・ 世が末に成りたるとて人々思いくたし精を出さぬは無念の事に候 世に咎は無し
- ・ 理を付けては道は立たず
- ・ 何事も実である事
- ・ 道と云うは我が非を知る事也 念々に非を知って一生打ち置かざるを道と云う也
- ・ 不定世界の内にて、愁いも悦びも、心を留むべき様なきこと也
- ・ 歎かじな悦びもせじとにかく昨日は今日の昔なりけり

【②自立自尊の覚悟】

- 武士道とは死ぬことと見つけたり、男は「命を惜しまぬ」に極まりたり
- 人の一身に大切なのは気概である 命などは散ってゆくものである
- 死に際のよき者は曲者(頼りになる者)也
- 一念発起すれば則ち立ち上がる事也
- 武士たる者は武勇に大高慢をなし死狂いの覚悟が肝要也 不断(普段)の心立ても
の云い 身の取廻し万綺麗にと心掛け嗜むべし
- 一生の仕事は人の為になるばかり 私を立つまじき 私の情識を捨て古人の金言を
頼む
- 何事も皆偽りの世の中に死ぬるばかりぞ誠なりける 常住死人なに成りたるを誠の
道に叶いたると云う也
- 天下を取る事は大気、勇氣、智慧がなければならず
- 常住死身
- 只独りで生き 只独りで死ぬ

【③生命燃焼の自覚】

- 不仕合せの時草臥るる者は益に立たざる也
- 修行は大高慢でなければ役に立たざる也
- 心を躍らせ 顔を上げて前を向け
- 兼ねて必死の極め候はば 何しに平生卑しき振舞いあるべきや
- 武士たる者は二十八枚の齒を悉く噛み折らねば物事埒明かず
- 士たる者は名利の真中 地獄の真中に駆け入りても主君の御用に立つべき事也
- ↓敢えて「名利を求めよ」。いつまでも低い地位にいては、大きな仁を成すことは
難しい。名利を求めない枯葉のような出家連中は腰抜けである。地獄や修羅場で
立つてこそ人間の甲斐があるというもの。
- 自分を弱くするな
- ↓武士たる者が、しよぼしよぼして意気消沈した格好でいるのは情けない
- 勇氣をもって前進し何事にも打ち勝つ明るい心でなければ役に立たない
- たまたま人間に生まれ 思い出無くて死なん事は無念也 いざ天下を取るべし
- 一歩も跡へ帰らず直に立ち向かうべし
- 詞(ことば)の勢いが武篇の大事なり 詞を掛ける勢いにて仕澄也
- ↓言葉で自らを鼓舞する
- 「水増されば舟高し」と云う事有り 器量者または我得方の事は 難しき事に出会う
ほど一段進む心に成る也
- ↓困難に遭遇したら欣喜雀躍してこそ男。
- 気力さえ強ければ 詞(ことば)にても身の行いにても道に叶う様に成るもの也

- ・しほたれ草臥れたるは疵なり
- ・勇み進みて物に勝ち浮かぶ心でなければ用に立たざるなり
- ・心を踊らせ笑顔で進め

【④勇知仁の断行】

- 本気にて大業は成らず 氣違ひにて死狂いするまでなり
- 男たる者は生死を離れ私心を斬り捨てねば何事も役に立たず
- ・柔和慈悲心ばかりにて何として成るべきや 大勇氣なくして駆け入らるべからず
- ・「武勇の為怨霊悪鬼とならん」と大悪念を起こしたらば、首の落ちたるとして死ぬはずにて無し
- ・何事も成らぬと云う事なし 一念起こると天地をも思いほかすもの也 成らぬと云う事なし
- ・人中を避けて引っ込みたるは臆病者也 宗風を奮い起こして道を開く事はなるべからず
- ・臆病魂一つ足り申さず候
- ・武士の前疑いは臆病の本と知るべし
- ・無二無三↓端的ただ今の一念より外は之れ無く候 一念一念と重ねて一生也
- ・時に応じ変に乗じ 詞(言葉)を掛くる勢いにて仕澄ます也↓詞の勢いが大切
- ・一足も跡へ帰らず 直ぐに立ち向かうべし

【⑤崇高さを目指す美学】

- 恋の至極は忍ぶ恋と見立て申し候
- 人は内には勇知仁を備え 外は閑かに強み有るがよし
- まず礼儀正しきこそ美しけれ
- ・聖は非を知る↓道とは我が非を知りそれを改めること
- ・名人は難に臨み候て滞みなきもの也
- ・茶の湯の本意は六根を清くする為也↓意を清くして自らを欺かず
- ・志は松の葉に包め(贈り物がささやかでも心を込めよ)志は見せるなり忍ぶ恋)
- 「知」↓人に談合するばかり也
- 「仁」↓人の為に成る事也 我と人と比べて人のよき様にするまで也
- 「勇」↓歯噛みなり 前後に心付けず歯噛みして踏み破るまで也
- ・外には風躰 口上手跡なり これは常住の稽古にて成る事也。大意は閑かに強み有る様にと心得るべし
- ・見苦しき死をめされては無念の事に候
- ・人を容れて絶点を目指す
- ・手本↓色々な人からそれぞれの良いところを手本とする

【⑥判断基準】

- 二つ二つの場にて早く死ぬ方に片付くばかりなり
- 分別は四請願に引当てて 凡ゆる人を役に立つよう恥に成らぬようにして良き様にすべし
- ・ 私欲を立てない
- ・ 七息思案
- ・ 当時気味良き事は必ず後に悔やむこと有る事なり
- ・ 良き事は苦痛に耐えること
- ・ 我氣に入らぬ事が我為に成るもの也

【⑦永遠の自己革命】

- 毎朝毎夕改めては死に改めては死ぬ
- 必死の観念一日仕切りなるべし
- ・ 只今が其時 其時が只今也 二つに合点して居る故 其時に間に合わず死ぬまで極まらず 己の非を知って探捉するが則ち道也
- ・ 修行は一生也
- ・ 二六時中も工夫修行にて骨を折ること肝要なり
- ・ 短氣にしては成らぬ事も有り ここぞと思う時は手早くたるみなき様にしたるがよき也
- ・ 時節到来と思わば潔く崩したるがよき也 その時は抱え留まる事も有り
- ・ 只今が其時 其時が只今也 二つに合点して居る故其時に間に合わず
- ↓日頃の油断今日の不覚悟を反省せよ
- ・ まず種子は確かに握りてさてよく熟する様にと修行する事は一生止まる事はならず
- ・ 皆人氣短か故に大事を成らず仕損ずる事有り いつまでもいつまでもとさえ思えばしかも早く成るもの也
- ・ 時は金也 泣き事を言っている暇はない
- ・ 嘆くまい喜びもしまい とにかくに昨日は今日の昔であつた
- ・ 情け容赦なく物事を覆すのは人の為にならな
- ・ 恥を与えては何しに直り申すべきや

【⑧先人の魂\エール】

- 何ぞ人が人に劣るべきや\同じ人間が誰に劣り申そうか
- 熱意は磁石
- ・ 第一 口を慎むべし
- ・ 油断すれば必ず落度有るもの也
- ・ 「機嫌はよいぞ」

- ・彼も人也 鬼神にてはなし 少しも劣るべき謂れ無し
- ↓手に吹毛の剣を握り触れる所斬り去らぬもの無し
- ・人間に生まれ出るのも生々の大幸と存すべき事に候
- ↓人間として生まれたという己の運命を愛する
- ・名人の上を見聞て及ばざると思うは不甲斐なき事也 名人も人也 我も人也
- ・当介(あてがい 分相応)を思い 自慢を捨て 我が非を知り 何とすればよきものかと探捉し 一生成就せず探捉仕り死ぬに極まる也 非を知って探捉するが則ち取りも直さず道也
- ・軽き事には鳴り廻して澄ませたるがよし
- ↓軽いことは大声で収めてしまうがよい
- ・太陽のような男であれ

生命燃焼のプロセスの八側面のそれぞれに一つか二つの言葉を代表して載せ(各項目の●の言葉を中心に)、多少のアレンジを加え、それを信条としたい。

【信条】ゝ人は自分が創ったものとなるゝ

- 一、天地は陰陽の循環なり 義より上に道はあり 格を離れたる姿有り
- 一、武士道とは死ぬことと見つけたり 男は「命を惜しまぬ」に極まりたり
- 一、人の一身に大切なのは気概である 命などは散ってゆくものである
- 一、不仕合せの時草臥るる者は益に立たず
- 一、本気にて大業は成らず 気違いにて死狂いするまで也 犬死に恥にはならず
- 一、男たる者は生死を離れ 私心を去らねば何事も役に立たず
- 一、恋の至極は忍ぶ恋と見立て申し候
- 一、人は内に「勇知仁」を備え 外は「閑かに強み有る」がよし
- 一、二つ二つの場にて早く死ぬ方に片付くばかりなり
- 一、志は松の葉に包み 分別は四請願に引当て 凡ゆる人を役に立つ様 恥に成らぬ様に
して良き様にすべし
- 一、必死の観念一日仕切りなるべし
- 一、己の運命を愛し 毎朝毎夕改めては死に改めては死ぬ
- 一、何ぞ人が人に劣るべきや 同じ人間が誰に劣り申そうか

● 誓願

「誓願」は自己の生命燃焼が目指す「憧れ・理想」である。

物事はまず理想である。理想が正義である。その理想を実現するために、生活を組み立てていくのである。生活の先に理想があるのではない。理想をまず持ち、そこに向かつて生活を構築していくのである。

「葉隠」序文に四誓願があり、少しアレンジするがほぼ流用させてもらう。

一、武士道において遅れ取り申すまじき事

↓ 勇智仁を天下に現すべき事と覚悟すべし。これは「俺が俺が…」という意識ではダメである。つまらない私利私欲を排して、無私にて己の勇知仁・愛・信念・誠を断行し具現化していくのである。物事の損得や好き嫌いを考えるから、「私」が生まれる。道に順い、信条に従い、命懸けの体当たりで進むだけである。

一、造化の道に位育参贊すべき事

↓ 造化Ⅱ宇宙の意志Ⅱ誠Ⅱ勇智仁の具現化Ⅱ人の道

一、親に孝行すべき事

↓ 孝は忠(宇宙の意志の実現)と不可分。死狂いの体当たりの中に忠孝は含まれる
一、大慈悲心を起こし人の為になるべき事
↓ あらゆる人を役立たせるよう、恥をかかせぬよう、良き様に。

葉隠四巻の二十五に以下のような言葉もある。「家中」という言葉を「家族・学校・地域・会社・組織・業界・我が国・世界」等に置き換えて、それを願う魂になるよう、自分の魂を引当ててみる。それが「無私」である。

一、家中によき者出で来候様(すぐれた人が出てきますように)
一、家中の者当てがいを取り失い申さざる様(皆が自分の役割を全うしますように)
一、家中に病者出で来申さざる様(皆が健康でありますように)

【誓願】く人間の初心と志く

一、武士道において遅れ取り申すまじき事

一、造化の道に位育参贊すべき事

一、親に孝行すべき事

一、大慈悲心を起こし人の為になるべき事

● 両儀と絶点

「信条」に支えられた「誓願」も掲げた。誓願の上には何があるのだろうか。「易経」の構造とパラレルに考えてみると、あと二つ上にあることになる。「易経」は六十四卦、三百八十四爻からなるが、それを構成要素に分けると八卦となり、四象、両儀（陰陽）、そして太極に帰納される。全ては太極を目指し、全ては太極から派生する。私の中の両儀は「聖（陰）」と「道（陽）」である。「聖（ひじり）」とは、非知り／陽知りである。未熟なところを知り、良いところを知って、謙虚で雄々しく自らを成長させていくこと。「道」とは、勇知仁の具現化の為の限らない努力である。そして太極とは絶点であり、それは「全き一」という崇高さをどこまでも目指すというロマンである。人間の都合や私利私欲とは違う、宇宙の秩序や調和としての真善美である。宗教家はそれを「神仏」と呼ぶ。

【両儀】

- ・ 聖（非を知る）
- ・ 道（限らない努力）

【絶点】

- ・ 全き一（崇高）

【絶点】

・全き一（崇高）

【両儀】

・聖（非を知る）

・道（限らない努力）

【誓願】　ゝ人間の初心と志ゝ

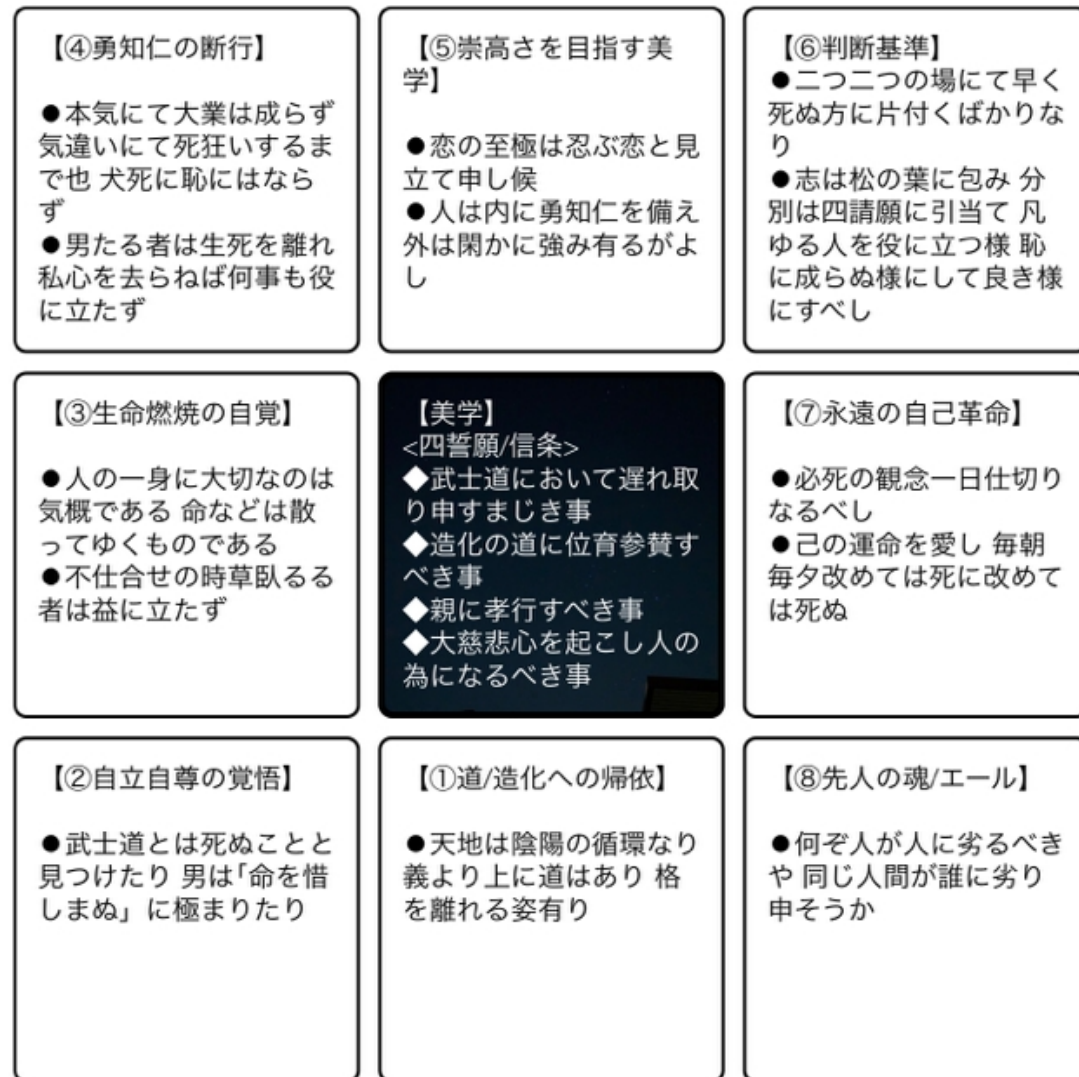
- 一、武士道において遅れ取り申すまじき事
- 一、造化の道に位育参贊すべき事
- 一、親に孝行すべき事
- 一、大慈悲心を起こし人の為になるべき事

【信条】　ゝ人は自分が創ったものとなるゝ

- 一、天地は陰陽の循環なり 義より上に道はあり 格を離れたる姿有り
- 一、武士道とは死ぬことと見つけたり 男は「命を惜しまぬ」に極まりたり
- 一、人の一身に大切なのは気概である 命などは散ってゆくものである
- 一、不仕合せの時草臥るる者は益に立たず
- 一、本気にて大業は成らず 気違いにて死狂いするまで也 犬死に恥にはならず
- 一、男たる者は生死を離れ 私心を去らねば何事も役に立たず
- 一、恋の至極は忍ぶ恋と見立て申し候
- 一、人は内に「勇知仁」を備え 外は「閑かに強み有る」がよし
- 一、二つ二つの場にて早く死ぬ方に片付くばかりなり
- 一、志は松の葉に包み 分別は四請願に引当て 凡ゆる人を役に立つ様 恥に成らぬ様に
して良き様にすべし

- 一、必死の観念一日仕切りなるべし
- 一、己の運命を愛し 毎朝毎夕改めては死に改めては死ぬ
- 一、何ぞ人が人に劣るべきや 同じ人間が誰に劣り申そうか

これらが、精神的背骨であり縦系である。ここに、世の中のあらゆる「喜怒哀楽・栄枯盛衰・利害得失・艱難辛苦・海千山千」の出来事という横系が交わりながら、運命・人生という織物を紡いでいく。



「誓願」を支えるものが「信条」となる。「信条」を支える言葉も、それぞれの信条の周辺に配置する。

全体として、自己の生命を燃焼させる為のエネルギー供給源である。

この信条に生きることができたかどうかは、死ぬときにしか判断できない。

「この信条に生き、この信条に死ぬ」。これが私の理想である

・人中を避けて引込みたるは罪病者也。罪過を覆ひ隠こして過を隠く事はなるべからず(10-147)	・罪病者一つ足りず煩(14)也	・無二無三(1-100)→臨終だこの一念より外は忘れ無く候。一念一念と憂ねて一生也(2-17)
・何事も成らぬと云う事なし。一念起ると天地をも悲いほかすもの也。成らぬと云う事なし(10-145)	【本義知仁の修行】 ●本義にて大業は成らず死運にて死にいたるまで 大死に恥にはならず ●死たる者は生死を離れ私心を去らねば何事も役に立たず	・時に応じ更に兼じ、詞(言葉)を曲くる勢いにて仕度ます也→詞の勢いが大切(2-40)
・「我輩の為目重き魂とならん」と大業を起したらば、罪の落ちたるにて死ぬはず也(2-52)	・重荷・難心ばかりにて例として成るべきや。大業無くして暇け入らるべからず(6-21)	・一定も離へ隔らず。直ぐに直向かうべし(11-15)
・たまたま人間に生まれ、悪い出無くて死なぬ事は無念也。いざ天下を取るべし(2-16) ・修行は大業成でなければ役に立たざるなり	・一歩も離へ隔らず直に直向かうべし(11-15) ・詞(ことば)の勢いが死運の大業なり。詞を離れる勢いにて仕度する(2-40)→言葉で自らを鼓舞する	・「永運されば無量」と云う事有り。無量者、または救済方の事は、離しき事に成らうほど一段運心も成る也(2-41)→運心に運運したら救済運してこそ其。
・自分を弱くするな→武士たる者が、しょしょいばして身弱成した地獄である 命などは取ってゆくものである ●勇気をもって前進し何事にも打ち勝つ明るい心でなければ役に立たない	【3生命燃焼の自覚】 ●人の一身に大切なのは気脈である 命などは取ってゆくものである ●不仕合せの時早める者は益に立たず	・気力さえ強ければ、詞(ことば)にても身の行いにても運に叶う事に成るもの也(2-133) ・心を離らせ 顔を上げて前を向け
・主たる者は名利の真中・地獄の真中に墜け入りて主君の御座に立つべき事也(2-130)→假して「名利を求めよ」。いつまでも低い地位にいては、大きな仁を成すことは難しい。名利を求めない松達のような出家道中は難敷である。地獄や修羅	・兼ねて必死の極め候はば、何しに平生生きし難いあるべきや(1-63) ・武士たる者は二十八枚の面を悉く極めやらねば物事時分(2-21)	・しほたれ事取れたるは疲なり。美み込みて物に落ち浮かぶ心でなければ、用は立たざるなり。人をも引き立つ事これあるなり(1-73) ・心を離らせ其運で進め
・武士たる者は、武勇に大業成をなし、死にいの賞儀が好まぬ。不測清朗の心立て。もの云い、身の取廻し。万難に心離け堪むべし(2-30)	・一生の仕事は人の為になるばかり。私を立つまじき 私の情誼を捨て去るの命を頼む(1-4)	・何事も皆角りの世の中なるばかり。死ぬるばかりを諷りける 常世死人になに成りたるを誠の道に叶いたると云う也(10-60)
・一念発起すれば別ち立ち上る事也(11-142)	【2自立自尊の覚悟】 ●武士道とは死ぬことと見つけたり 勇は「命を惜しまぬ」に極まりたり	・天下を取る事は大業。勇義、誓願がなければならず(10-143)
・死に際のみ者は曲者(曲り)なる也也(11-125)	●武士は「命を惜しまぬ」に極まりたり	●常世死身 ●只独りで生き 只独りで死ぬ
●志は松の葉に包め(11-42)→強り敢かきやかでも心を込めよ直は覚せるな→忍ぶ(忍)		知→人に適合するばかり也。量も無き智也。仁→人の為になる事也。我と人と比べて人のよき様にするまで也。順手を受忍する。真→端々なり。前後に心付けず。直端みして踏み破るまで也。
・所の通の本意は、六根を清くする為也(2-110)→尊貴。意を清くすることである。は誠意→自らを致さない(大守)	【5崇高さを目指す美学】 ●忠の至極は忍ぶ忠と見立て申し候 ●人は内に義知仁を備え外は関かに強み有るがよし	・見差しき死をめされては無念の事に候(2-30) ●人を留めて絶点を自覚す
・10-59の名人は難に陥み候て染みなきもの也	・1-42誓は前を知る→運とは我が所を知りそれを改めること	・手本→色や人からそれぞれの貴いところを手本とする(2-46) ●まず礼儀正しきこそ美しけれ
【6義知仁の修行】 ●本義にて大業は成らず死運にて死にいたるまで 大死に恥にはならず ●死たる者は生死を離れ私心を去らねば何事も役に立たず	【5崇高さを目指す美学】 ●忠の至極は忍ぶ忠と見立て申し候 ●人は内に義知仁を備え外は関かに強み有るがよし	【6判断基準】 ●二つ二つの境にて早く死ぬ方に片付くばかりなり ●忠は松の葉に包め 分別は四段論に引当て 凡ゆる人を役立つ様 恥に成らぬ様に仕て貴き様にすべし
【3生命燃焼の自覚】 ●人の一身に大切なのは気脈である 命などは取ってゆくものである ●不仕合せの時早める者は益に立たず	【5字】 ●死運・宿命・ ●武士道において運れ取り申すまじき事 ●運化の道に信用参すべき事 ●恥に参行すべき事 ●大慈悲心を起し人の為になるべき事	【7永遠の自己革命】 ●必死の観念一日仕切りなるべし ●己の運命を變し 毎朝毎夕改めては死に改めては死ぬ
【2自立自尊の覚悟】 ●武士道とは死ぬことと見つけたり 勇は「命を惜しまぬ」に極まりたり	【1運/運化への帰依】 ●天地は陰陽の道理なり 貴より上に運はあり 格を離れる要有り	【8先人の魂/エール】 ●何ぞ人が人に死るべきや 同じ人間が誰に誇り申すか
・運を付けては運は立たず ・何事も実である事 2-106	・運と云うは我が非を知る事 世々々に非を知って一生打ち置かざるを運と云う也(1-47)	・「身は無量の内より生を愛くこと有り。何も無き我が命は空なり。其何れ無き所にて万事を働うがが空即無色なり。二つに成らぬ理也(2-31)
・世が末に成りたるとして、人々悲いたし。精を込めは無念の事に候。世に前は無し(2-36)	【1運/運化への帰依】 ●天地は陰陽の道理なり 貴より上に運はあり 格を離れる要有り	・不定世界の内にて、想いも遊びも、心を離むべき様なきこと也(2-56)
・世界は皆からくり人形也(1-42)→(2-44)	・ものが二つに成るが悪しき也。通の字は同じ事也(1-130)	・10-161敢かじな遊びもせじとかく許日は今日の貴なりけり
・1-183我事事は吾徳に耐えること	・3-34當時気味良き事は必ず後に悔やむこと有る事なり	・1-121七世悪業
・3-41我事に入らぬ事が我が身に成るもの也	【6判断基準】 ●二つ二つの境にて早く死ぬ方に片付くばかりなり ●忠は松の葉に包め 分別は四段論に引当て 凡ゆる人を役立つ様 恥に成らぬ様に仕て貴き様にすべし	・1-5-1-6私欲を立てない
・只今が其時 其時が只今也 二つに合点して其故。其時に間に合わず→世の道断 今日の不覚悟を反省せよ	・時節別家と思わば深く願したるがよき也。その時は其大業成る事もあり(2-27)	【7永遠の自己革命】 ●必死の観念一日仕切りなるべし ●己の運命を變し 毎朝毎夕改めては死に改めては死ぬ
・時節別家と思わば深く願したるがよき也。その時は其大業成る事もあり(2-27)	・死めまで離らず。己の命を知って探照するが前も運也 ・修行は一生也 二六時中も工夫修行にて費を計り(2-133)	・「情け容れなく物事を獲すのは、人の為にならぬい(6-63) ・恥を辱えては何しに誇り申すべきや(1-14)
・人間に生まれ出るのも生々の大事と存すべき事に候(1-50)→人間として生まれたといひ己の運命を愛する	・名人の上を見聞て及ばざると思ふは不甲斐なき事也。名人も人也。我も人也(1-116)	・当介(あてがい 分相)を思い、自腹を捨て、我が言を知り。何とすればよきものかと探照し、一生成就せず探照せり。死ぬに極まる也。非を知りて探照するが、前も取りも置きず運也(2-111)
・「我運はよいぞ」(2-82)→百道(5-31)	【8先人の魂/エール】 ●何ぞ人が人に死るべきや 同じ人間が誰に誇り申すか	・軽き事には過り願して運ませたるがよし(2-120)→輕いことは大声で収めてしまうがよい
・「我運はよいぞ」(2-82)→百道(5-31)	●第一 口を慎むべし ●油断すれば必ず漏洩有るもの也(2-40)	・大業のような賢であれ ●無意は磁石

※それぞれの信条やその信条を支える言葉の解釈等は、来月号で「補足」として書きたいと思う。

●魂の退化を食い止める

魂に関しては、人類が誕生した最初が一番高度で、文明や社会が発達するにつれてどんどん低下してきた。成長してきたのではない。魂は退化の一途をたどっている。科学技術が発達し、文明が発達し、生活が便利で快適で豊かになればなるほど、その快適さや便利さと反比例するように、精神の鍛錬になるような状況は少なくなった。これはある意味仕方がない。科学技術というものは、人間の成長のために使われるより、快適・便利・欲望の満足の為に使われるものだから、魂は成長ではなく退化するのだ。

魂の退化は食い止めなくてはいけない。

人間の魂とは、それを知ったとき、覚悟を決めた時が始まりである。従って、今の地位や持ちものや他者との関係性は一切関係ない。今から自分の運命に体当たりして、自ら築き上げてゆくかどうかだけである。

子どもだった頃は親からの躰があるから、自分を律することも身を以て学べるが、大人になると自ら厳しく律しないと、自分を甘やかして怠惰になる。「オレが稼いだ金だからいいじゃないか。休みだからいいじゃないか。好きなんだからいいじゃないか」。しかし、その考えと習慣こそが、魂の退化の原因であり、病気や老化を促進させていく。知性も精神も肉体も、継続した鍛錬無しに成長発達することはない。廃用性萎縮。鍛錬しなければ退化する。甘やかしていたら退化するのだ。大人こそより一層自分を律し、鍛錬する必要がある。

言い訳して自分を甘やかすことが良くないのである。捨てなければならぬものはない。全てを捨てて出家しなければ自分を鍛錬することができないというわけではない。捨てる人は逃げる人というだけである。人間関係、名誉、金、持ち物、家庭：、例え全てを捨てたとしても何の意味もない。

「武士道に生きる」「愛に生きる」「仁義に生きる」と決意すれば、その日が始まりである。そして崇高に向かって歩んでいく。それを阻止しようとして働く力があるならば、結果としてそれらを捨てることになるだけである。ただ、本人の決意が本物なら、阻止するものはほとんどないはずである。捨てる捨てないという物質論はどうでもいいのだ。そこに固執するのは、甘い自分のままにいたいだけである。魂とは精神の問題であり、文字通り精神論である。覚悟を決めて体当たりして進むだけである。自らの「信条」を携えて。

今月も健康と健闘を。